

★講
演★

保育の理論と実践

佐藤 文子

——幼児教育をめぐって最近考えること——

〔一九七八年九月二〇日に幼児教育
現職研究で行なわれた講演より〕

御紹介いただきました佐藤です。

先程、本田先生が現場との共同がうまくいっているようなことをおっしゃいましたが、実は今、幼稚園から少し遠のいています。研究の視点について、また共同研究のあり方について、いろいろと問題を感じておりますので、今日は私が最近考えていることの二・三を述べさせていただきます、皆さんの御意見や御助言をいただければと思っております。

私は、大学では幼児心理学の担当ということになっていますが、臨床心理学から幼児にかかわるようになりましたので、幼児教育の領域に迄、臨床心理学的な問題意識をもち込んでいるのかもしれない。それでこういう場で私事を話すのも思いますが、私の歩んだ道について一寸述べさせていただきます。

私、大学は英文科出身ですが、大学時代の終り頃から興味・関心が少しずつ別の方向へ向かうようになりまして、哲学・宗

教学の先生の研究室によく邪魔していました。そしてブーバーとかフランクルなんかを読んでいたが、その先生が「臨床的な人間理解」とか、「人間関係」ということをしょっちゅう口にされるものですから、私もその影響を受けながら、次第に心理学の方へ向かうようになり、遂に大学院で心理学を勉強することになりました。大学院では最初の頃、これも教授の助言もあってサリバンを研究していました。

ブーバーは、ご存知のように、人間の基本的なあり方を、関係における存在として哲学的・人間学的に基礎づけようとした。またサリバンは、精神分析学の流れをくむ精神医学者ですが、社会学的観点を重視し、精神医学を、人間関係を研究する学問と定義しました。

ここで一寸精神分析にふれさせていただきますと、フロイトはヒステリーの治療から精神分析を始めました。当時、ヒステ

リーの患者を催眠療法で治療している時に、たまたま患者が昔の不快な経験を思い出して口にした。ところがその後ヒステリーの症状が消えた。そこでフロイトは過去の不快な経験を抑圧することからヒステリーのいろいろな症状が出てくるのだと考えたのです。そして更に多くの患者について治療経験を重ねながら、精神分析の技法と精神分析学の人格理論を発展させました。このようにしてフロイトは幼児期の体験を非常に重視するのですが、性的な体験を特に重視しました。これに対してサリバンは幼児期の人間関係を非常に重視しました。

フロイト以後、ヒステリーだけでなくさまざまな神経症の治療にも精神分析が適用されるようになりますが、精神病、特に分裂病には精神分析を適用することはできないと長い間考えられておりました。ところがサリバンは分裂病患者と接触しながら、初期の人間関係の歪みが分裂病という重篤な精神病に至らせるのであり、人間関係の中で安全を感じることによって、分裂病患者も回復しうることを知ったのです。分裂病は内因性疾患で治療不能と長い間考えられていたのですから、サリバンのこのような知見は精神医学界において非常に画期的なことだったわけです。

大学院ではこんなことを勉強しておりましたが、実際にはな

かなか臨床経験がもてず、またその機会があっても指導をしてくれる人がいません。その頃たまたまアメリカに留学する機会がありまして、二年半あちらで臨床訓練を受けることになりました。

アメリカでは、臨床心理学で学位を取るためには、大学院での授業と論文の他に、最低一年間、アメリカ心理学会公認の施設で臨床訓練を受ける必要があります。私もそのインターンプログラムに入れてもらったのです。大学院の教育そのものが日本と大分違っている上に、ことばのハンディキャップがあり、最初は大変苦労いたしました。

そんな時、ディレクターから「子どもの方をやってみてはどうか」と言われました。最初、滞在予定が一年間でしした、それにアメリカでは児童精神医学は一般の精神医学を学んだ後にやることになっています。それで短期間の中にあまりあちこち手を出すよりとは思っておりましたので、一寸躊躇いたしました。——実は私が渡米する直前になって心理学部門のディレクターが変わりまして、新しいディレクターはドロリーエと言いまして、小児分裂病や自閉症の研究をしている人でした。当時——私が渡米したのは一九六七年ですが——日本の精神医学界でも自閉症は大きな問題となりにかけていましたが、日本では自

閉症の定義とか分類に精神医学者の関心は向けられていて、なかなか治療の方法を考えるとどこまでいっていなかったようです。そういう状況において、ドローリエが自分の理論をもって自閉症児の治療にあたっていることは非常に魅力的でした。それで最初の自分の計画にこだわるよりもディレクターの専門とするところを学んでいくのもよいのではないかと思い直し、子どもをやってみることにしました。これが幼児にかかわるようになった最初と言ってよいでしょう。

ここでは、自閉症の理論を検討することが目的ではないのですが、一寸ふれさせていただきます。当時、日本でもアメリカでも、自閉症の病因に関して、親の拒否的な態度が原因で自閉症と呼ばれる症状が出てくるのだという考えが有力でした。これに対してドローリエは、自閉症児は生来的に神経生理学的障害があつて情緒的、感覚的刺激を受入れることができないのだと考えるのです。私たちはいろいろな刺激にかまれていながら、それらを構造のある環境として理解し、受入れ、かわっているのですが、それができるためには、感情的情緒的要素が重要な役割を果しております。ですから情緒的な刺激を受入れられない自閉症児は学習、従つて発達に大きな支障が出てくることになります。病因についてのこのような考えから、治療の

方法が導き出されますが、普通の子どもが成長、発達の過程で経験する人間的情緒的刺激を、自閉症児の神経生理学的障壁を越えて子どもに達するように、強力に与えることが治療の中心となります。

さて、私たちは彼のこのような考え方を理解し、治療のデモンストレーションを観察します。そこでは、人間のかかわりをもたないと言われている自閉症児が、まるで彼を待っていたかのように反応し、一緒に生き生きと動いているのです。そこで私たちも自分に与えられたケースについて、同じ方法でやってみるのですが、なかなかうまくいきません。こちらから積極的にはたらかけないかぎり自閉的な子は動きません。一緒に何かしようと思うとやたらに動き回り子どもを引きずり回し、両方ともくたくたになってしまいます。彼はそういう場面を見て「あなたは一体何をしてたのか」ときくのですが、そこで自分の行動をふり返つてみると実に無意味な動きの連続なのです。

ゼミとかスーパービジョンで話し合っている時はわかったように思えても、実際に子どもとむかい合うとうまくいかない。どうしようもなくいる時に、彼が入ってくる。そうすると子どもは生き生きと動き始める……それはまるで彼の人格の中に子

どもをひきつける魔力でもかくされているかのようなのです。そこで私たちは、彼は理論というけど、彼のパーソナリティが治療を可能にしているのではないかと彼に言ったのですが、彼は「私は自閉症をこのように理解し、治療の方法を考え出したのだ。だからこの理論を正しく理解してやれば誰にでもできる」と主張するのです。

それで私は臨床における「理論と実践」とはなんだろうかとつくづく考えさせられました。理論というのは普遍的なもので、誰がやってもこうなるというものでなければならぬはずで、しかし臨床の場合、なかなかそういかない。そこで技術が悪いからだということになる。アメリカの臨床訓練ではスーパージョンが非常に重視され、そこでは私たちが臨床場面で行なっている言動が本当に適切なものであるのかどうか吟味されます。確かに理論は適切な技術を通してその効果を発揮するので、そのためには技術の習熟は臨床に携わる場合、欠かせないことです。ですがそのことはここでは一寸おいておきます。先にも申しましたように、私はゼミとかスーパージョンを通して、ドローリエの理論を理解したつもりでいました。彼はキャンサス市に来る前にシカゴで自閉症研究のプロジェクトをもち、丁度私がキャンサスにいた頃、その結果を本にまとめて

いました。私とその本を読んだのは、子どもの臨床を終えた頃でした。そこで私が感じたことは、先に私は彼の理論を理解したつもりでいたけど、結局私の理解は一つの知識にすぎなかったのではないかとことです。彼は長年にわたって大勢の子どもについて経験してきたことを自分のことばで体系化したのです。それに対して私は彼の考えを知識として受入れ、彼の行動を模倣していたにすぎないのです。結局、当時私にとって彼の理論は、そこから行動が導き出され、また行動がそこに位置づけられるような私の理論にはなっていなかったのです。当時私の治療がうまくいかなかった主な理由はこんなところにあったのではないかと考えられるのですが……。

次に、今、ドローリエが自分の経験をことばで体系化した、すなわち理論化したと申しましたが、このことについて少し考えてみたいと思います。経験というものは言語的に客観化されない限り、他の人と共有することもできないし、また思考の対象にもなりません。でも経験を言語化するということは実に難かしいことだと思ふのです。これは単に技術の問題ではなく、経験とことばという両者の性質によるのではないかと考えます。このことは心理療法とか精神分析の本質にかかわってくるのではないと思いますが、心理臨床において重要な人間を理

解するということとの関連で考えてみたいと思います。

心理診断ということがあります。これは心理テスト等を用いて相手の心的状態を知ることです。標準化されたテストを用いる場合は、誰がやっても同じ結果が出て、同じように解釈されるということが前提となります。一方、心理療法や精神分析は、面接者と被面接者の相互関係に基づく自己理解の過程です。両者がかわり合う中で、被面接者は自分の問題に気づき、変化していく。これは診断の過程であると同時に治療の過程であるのです。両者の関係の中で、被面接者はそれまで気づかなかった自分の感情や気持ちに気づくようになるのですが、それは言語化されることによって明確になります。が言語化——対象化した時、真の自分は一歩前に進んでいるのです。対人状況における事象を言語化することはいつも事象の後ろを追いかけているようなもので、事象はいつも言語をすり抜けてしまうように思われるのです。こうした状況において私たちが共有しているのは、非常にきめの荒い理論なのではないでしょうか。

先人の理論を受けついで、自分自身を道具に臨床活動に従事し、そこで自分の経験を反省する時、どうしても先人とは違った理論が生れてくるのではないのでしょうか。精神分析の歴史をふり返ってみる時、フロイト、ユング、アドラー……と精神

分析学の基本を共有しながら、それぞれが異なる理論を展開しているのも、それぞれが対象とした患者、そして関心のむけ方が違っていたというだけでは解釈しきれないように思われます。そして私には偉大な先人たちも臨床経験の大事な部分を理論化しませんでしたのではないかと思われるのですが、この詳細については別の機会にふれたいと思います。

さて前おきの部分が非常に長くなってしまったのですが、教育の実践においてもこれ迄述べてきたような理論と実践のずれ、あるいはギャップがあるように私には思われるのです。教育の実践において保育者の理論と行動はどれだけ一致しているのだろうか。ずれているとすればどうして、どのようにずれているのだろうか。そしてそれは幼児にどのような影響を与えるのだろうか。そんな関心から保育場面を観察いたしました。

しかしここで大きな問題にぶつかりました。それは観察者としての私の立場からくるものですが、まず、保育者との話し合いの難かしさです、それは意見の相違以前の問題のようです。アメリカの臨床訓練ではスーパービジョンとかカンファレンスが非常に重要視されます。これらは、単に患者の問題を話題にするのではなくもっと別の機能があるようです。つまり、患者の問題を自分の問題として人々の前に出すことにより、自分自

身の成長の機会となります。実はこれがなかなか大変で、私は最初スパーバイザーと向き合うと防衛的になってしまつて、患者さんに会うより苦痛でした。しかし、だんだんと回を重ねるに従つてスパーバイザーともオープンに話し合えるようになってきました。ところがその頃になって患者さんとも前よりももっと自由に会えることに気づいたのです。

私は、保育者との関係をスパービジョンの関係とは考えてはいないのですが、単に話し合いの場としては解決できないように、いずれ両者の立場、役割をはっきりさせなければいけないでしょう。

次に、当然ながら保育者は見通しをもつて保育をしておりますので、結果の見通せない変更を保育にもちこむことには大きな抵抗があります。学部と附属、大学と現場との共同と口では簡単に言つても本当の共同とは何かということを双方が真剣に考えない限り、保育についての共同研究はできないのではないかと思います。

保育の理論を実践に密着したところで確立する仕事を大学と現場で共同で行なうためにはまだまだ多くの難問が残っているようです。

次に、幼児教育の内容に関わる問題かもしれませんが、幼児期に本当に必要な経験は何だろうかということです。これは幼児教育に関係すれば、当然つき当る問題ですが、最近特にこのことを考えさせられるようになったきっかけの二つをお話しします。

一つは、一昨年来、秋田大学幼児教育研究会が、都市化社会における幼児教育のあり方を探るために一連の共同研究を行なつてきました。私は「幼児の生活と発達」を分担しまして、秋田県で都市化の程度の異なる三つの地域——秋田県で最も都市化の進んでいる秋田市、秋田県の代表的穀倉地帯で小都市近郊にある平場農村、宮城県、岩手県の県境い栗駒山麓にある山村——の幼児の生活と発達を比較検討しました。結果は、地域による差は予想よりも小さかったのですが、またそれなりに一貫しており、幼児の発達に及ぼす地域環境の影響を考えさせられました。私達は都市↓農村↓山村の順に都市化がおくれていると考えたのですが、幼児の生活と発達においては、意外にも、山村の方が農村より都市に近い姿を示しました。

従来、農村の子どもの知的発達は都市に比べて遅れている、特に言語面において遅れていると言われてきました。平場農村はこのような農村の特徴を強く示し、絵を描いたり、積木を積

んだりとという動作的な面では進んでいるのですが、言語的表現能力が非常におくれています。山村は環境的に不利と思われるような側面に関連するところではおくれています。概して農村より都市に近い傾向がみられました。

この解釈についてまだ結論は出ておりませんが、都市においては、刺激や情報が多く、個人の中にさまざまな欲求をかりたてるような条件がそろっています。そこで子どもは情報を選択し、欲求をコントロールすることを学ばなければなりません。で、親の教育的統制が強まりますが、都市では核家族が多く、親の教育的期待や圧力がストリートに子どもに影響しがちのようです。また子どもの数も少くなり、育児経験のない親も多く、親自身刺激や情報過剰の中で不安定になります。このように都市では親の教育的期待や圧力が子どもの発達を早めているのではないかと考えられますが、一方で情緒的不安定になりがち子どももいるようです。

山村の場合は、地理的不便さや気象条件の厳しさが自然の統制になっており、また複合家族が多く、時には家族内の葛藤もみられるようですが、親の期待や統制がストリートに子どもに影響することは都市の場合より少いようです。

対象地域の農村は、小都市近郊にあつて、最近はいまの

普及で交通も便利になり、都市化に伴う生活の便利さという恩恵を受けながら、都市ほどストレスも多くないという状況の中で、また家族形態は複合家族が多く、親自身が問題にぶつかり、自分で判断し解決していかねばならないような問題場面が少いのではないかと考えられます。農村では子どもがほしがるものを買ひ与え、子どもがしたいことをさせるにまかせるような親の態度がうかがえるのですが、このような状況下では、子どもの生活に対する親の教育的統制はどうしても弱くなりがちなのでしょう。

あれこれ思いめぐらしながら、幼児期にはどのような経験が必要なのだろうか、幼児教育における家庭と幼稚園の役割を考えさせられます。

第二に、私は大学で主として幼稚園教員志望の学生の指導に当っております。私も年を取ってきたせいか、「今の学生は……」「今の若い人は……」ということばがつい口に出ます。学生と接触して感じて感じることは、非常に現実的であるようです。本当の意味の現実感覚に欠けているのではないかと感じます。たとえば、アルバイトの家庭教師の報酬とか、洋服代、コピー代等についてはどこが高いとか安いとか実に敏感です。ところが父親の収入がおよそどの位で、自分の学費は家計のど

の位を占めているのか、見当もつかない学生が意外に多いのです。また、国立大学がどのように運営されているのかわからない。運営という大げさですが、国費でまかなわれており、父親や友達が払っている税金もその一部である……といったことです。何か経験や知識が一つ一つバラバラで、環境の諸事を関連あるまとまりとしてとらえていないようなのです。

また自分の立場と異なる人に出会うと頑固に抵抗し、あれかこれか決着をつけないと気がすぎず、良いことと思うとわき目もふらずつつ走り、意外にもろく挫折する、こんな特徴もみられます。私は、結局自我が十分発達していいのではないかと思うのですが……。つまり問題場面にぶつかり、自分で判断し、行為する、そしてその結果を見きわめる過程で、環境に気づき、自分に気づく。こうしたくり返しの中で、自分を確信し、自我が発達していくのだと思うのです。そして自分の欲求と環境の要求を調和させようとする努力の過程で、思考の柔軟さもでてくると考えられるのですが、どうも今の学生にはこうした経験が欠けているように思われるのです。

こうした特徴は、私の接触している学生の特徴で、「今の学生は」と一般化することには問題があるのかも知れませんが、先に述べた農村の子どもの姿と共通するところがあるように思

われるのです。——実際には農村出身の学生はそう多くないのですが——。

そんなことで、今の学生はどんな幼児期を過ごしてきたのだろうか、今の幼児は何年か後にどのような青年に、そして大人になるのだろうかと考えてしまいます。

幼稚園教員養成ということを考えると、どういう保育者を養成するのかの前に、どういう人間になるのかが一そう重要なことと思われれます。発達の過程は社会化の過程でもあります、老人、成人、青年、児童、幼児それぞれが、それぞれに適切な役割を荷ない、責任を果しながら出会うところに、社会の秩序も生れ、文化の伝承もなされると考えるのですが、幼児のような大人、大人のような幼児が多くなっている昨今、幼児教育はどのようにしていくのかなとつい思ってしまうです。

大変悲観的なことを申し上げました。最近の幼児教育の普及と前進については、すばらしいと思うことも多々あるのですが、私自身極めて自閉的な興味や関心から子どもを観察して参りましたので、この辺りで少し問題を整理し、視点をはっきりさせて再出発しなければと思い、私の問題を多少誇張して述べてしまったように思われます。御意見や御助言をうかがえれば幸いです。

(秋田大学)